SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス No.149

1997. 9・10・11

=巻頭言=
大学と社会
阿部謹也／2．3
■第173回大学共同セミナー
—新しい映画史を考える— ／4
■第14回大学教員研修プログラム
—教える授業から学ぶ授業へ— ／5．6．7
■第34回大学教員懇談会
—入試と就職、そのはざまにある大学— ／8．9
■第175回大学共同セミナー
地球市民になろう
—環境破壊・戦争・貧困・民族紛争の解決の道を探る— ／10．11
■法人ニュース ／12
■千人会
会費ありがとうございました ／12
千人会員のお便りから ／12・13
■ハウス関係者の消息から ／12．13．14
■寄贈図書・寄付 ／13
■業務通信
わたしたちの合宿 ／13．14．15
■利用状況 ／15．16
■館長室から ／16

Plain living and high thinking

財団法人 大学セミナー・ハウス
INTER-UNIVERSITY SEMINAR HOUSE, INC.

第34回大学教員懇談会講演より

大学と社会

一橋大学学長　阿部　謹也

学生と教師がいれば、それが大学

大学と社会というとき、12世紀以降、ヨーロッパでできてきた大学が、社会とどのような関係であったかということが重要だと思います。まず、誕生当時の大学は、基本的に教会の一部として位置付けられていたといえます。司教座聖堂のある教会に、聖職者を教育するための学校ができます。そこに藁束を持った学生たちが集まって、回廊のあたりに腰を下ろし、教師の話を聞いた。それが大学です。学生と教師がいれば大学で、彼らが退去した途端に消滅したこともありました。

日本で、ウニベルシタスを大学と訳しましたが、直訳すれば組合ですから、これはある意味ではおかしいことです。学生や教師の集団がパン屋等々の手工業組合と同様の組織を作ったからウニベルシタスというわけです。教授、助教授、助手がそれぞれ親方、職人、徒弟と同じ関係でした。正教授だけが教授会の参加権や決定権を持つのは、親方だけが全ての権利を持ち、職人や徒弟には市民権すらなかった職人組合と全く同じです。ですから、職人組合が町中を練り歩く行事には、大学教授たちもガウンを着て一緒に加わっていました。

しかし、職人組合と学生はしばしば対立しました。市民は聖職者の卵である学生への門付けを断れない。それでも詐欺をする学生もいたりで都市の風紀を乱したりしたからです。

俗世の中で俗世に道を示す

大学は、全ての授業をラテン語で行ないましたので、インターナショナルな性格を持っていて、各国から学生が集まっていました。最初にできた大学の施設は、金持ちが教会に寄付をした学生の宿舎です。キャンパスができるのは、近代以降です。EUの大学構想には、加盟国内の大学に学籍があれば、他の全ての大学に行けるというのがあります。情況は違いますが、中世にもそのようなことが行なわれていました。

中世のキリスト教は、俗世それ自体を否定しません。教皇庁の後盾を持った教会を中心に世俗である都市が建設されました。教会は、世俗に対して、聖なるものの追求が絶対的正義であり、この世は最後の審判に向かっているという教理を常に突きつけました。そこから逸脱する国家に対しても介入を辞さなかった。したがって、教会の中にできた大学は、世俗の中の教会と同様、俗世の中で俗世に対して道を示すという役割を担いました。

神学性の脱却―国家や産業の養成機関へ―

中世の中頃になると、フリードリヒ2世といった皇帝や都市が大学を設置します。聖職者はローマに従うので、自前で官僚を養成するためでした。こうした大学は、世俗性を強めます。同時に大学は、医学、法学、神学、一般教育と領域を拡げていき、アベラールのような真理の探究を掲げる学者も現れました。絶対的真理を求める面があるとはいえ、ローマ教会と対立し、神学性を脱却して真理の追究に向かいます。

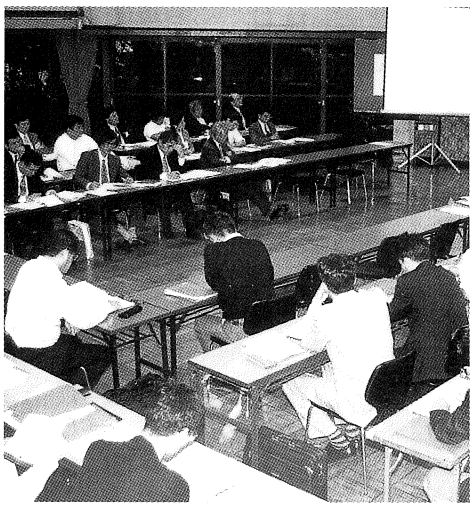
そして、16世紀には、領邦の官僚と司祭との両方を育成していた大学は、地域や国の要請に応えるようになります。フランス革命の前後には、産業や工業を育成するための専門の単科大学がたくさんできました。それらは、中世以来の四学部の大学と全く違います。

フンボルトたちは、そういうあり方を批判してベルリン大学を中小都市に作りました。ドイツ観念論哲学を教養として教授し、国政に参与する教授、法律家、行政官を送り出す。世界と宇宙に思いを馳せるように青年を俗世から離しました。しかし、それは、いわば国士を作るための教養ですから、俗を超えた義ではありません。大学の世俗との関係について、新しい姿勢を示したのではなく、むしろ絶対的正しさを俗世間に突きつけるという看板を下ろしてしまいました。

個人の誕生―集団的教養から個人的教養へ―

大学の設立とほぼ同時に、ヨーロッパでは個人が生まれてきました。これは重要で、単純にいうと、一二一五年にラテラノ公会議で年に一回は告白することになった。そこで自分の内面を探ることになり、個人が意識化されるようになったわけです。個人の出現によって、村で親の職業を継ぐべき人も、都市に出て職人の下で徒弟になり親方になる、農村貴族の有能な子供にも聖職者という出世の階段を登るといった道が開けました。

また中世から近代にかけての大学の変化は、個人の教養や学問にも大きな影響を与えました。私は教養について、いかに生きるかを考える姿勢から生まれるものと定義しています。そういう意味でいうと教養は、その頃に、つまり職人や農民が培ってきた知恵や技



阿部　謹也（あべ　きんや）
1935年生まれ。一橋大学学長。専門は西洋社会史。主著に『ヨーロッパを見る視角』『教養とは何か』『世間とは何か』などがある。

術といった集団的教養から、一人で生活の方針を立てるという近代的教養に代わりました。都市へ出た人が具体的に何をしようかと考える際に、個人という発想を受け入れる語彙は、キケロやボエティウスといったローマ時代の文献、つまり古典しかなかったわけです。

個人の掌握を試みる国家、大学

個人が生まれると、国家はその掌握を試みました。学生を承認する形で枠をはめます。医学博士という学位は医学での十分な能力を認定するものですが、文学博士となれば国家や大学がエラスムスやレッシングの理解について承認するわけです。実に滑稽な学位制度は、この頃に生まれ、今日まで続いています。

それから、ヨーロッパでは、13世紀頃から捜査令状を持った国家の代弁者が入れるようになって家宅のアジール権が奪われる。大学は、中世から近世にかけて個人の自立の押さえ込みに力を貸した。それでも、学生は制約に服さず、特にドイツでは激しい紛争を起こしました。それでも、大学にはアジール権の名残があります。ところで、日本の場合、国家と密着して国家を支えるという意識で帝国大学を作った。日本は全てが俗社会の論理で動いているので、俗社会を諫める集団や場がありません。各寺社にあったアジール権も明治になって全部捨てました。日本の法律には大儀がないんです。ですから、大学も俗社会の一つだということです。

世俗のシステムの一つとして―現代の大学

現代の大学は、EUの設立に学問とか学者が大きな役割を果たしていないように専ら研究と教育の場として位置付けられ、いかにして大学教育を進めていくかを当面の問題としています。地球上で飢餓状態の人が多数いるときに、膨大な国費を費す実験を行なう理由を大学で議論することは少なくなりました。それは、国家の自浄能力と社会自体が民主主義を義として自覚し、合意をもって現代の真理とするようになったからでしょう。大学が国家の政策に対して異を唱えても、それは絶対的正義ではなく世俗のシステムの義を主張することになります。

しかし、日本の大学が、研究と教育の場でしかないとすれば、社会との接点を失うことになると思います。イタリアは、高齢化対策として若者を受け入れるように移民法を改正しました。日本では、それと同じ主張は、袋叩きを恐れてか、聞こえてきません。しかし大学が象牙の塔といわれたのは、少数の学者が同様の主張をして社会から袋叩きにあっても、それを支える仲間が大学にいるということだったと思います。日本の大学は今も、そういう形で社会と関わるべきではないでしょうか。

日本の大学と「世間」の構造

ついでに、日本の大学が具体的にどうあるべきかを言います。一つは、文と理に分けるべきではないということです。日本の学者の中には、私は理科系人間ですからとはっきり言う人がいますが、そんな人間は存在しないと思います。文理に分けたのは、明治以来、総合大学の中でリベラルアーツを無視したことと工学部を主にしたことによるものです。これが弊害をいろいろと作ってきたのに、未だほとんど反省していません。

もうひとつ、最近の傾向について、大学教育の中で、17歳の理系の才能を伸ばそうといいますが、天才は教育によってではなく、教育にもかかわらず生まれてくるのだと考えています。多様な人間を作るという言葉は科白にすぎないのではないでしょうか。日本の教育は、従来から基本的に決まった形を作るものです。企業が個性的な人間がほしいと言っているようですが、個性的な人間の扱いにくさを十分知っているのも企業の方でしょう。

日本人は私のいうところの世間に属していて、世間の論理に縛られている。その世間は地域や階層などで違っていて、属する人はそこの掟を遵守する。大学でいうと、専門領域が世間で、その中にまた世間が入っています。世間が準拠集団になっているのが、日本のソサエティの構造です。したがって、どう見られるかが常に問題になります。

日本では個人が、周囲を見ながら自分を位置付けます。それはとても大事なことですが、自分の意見を述べる社会にしなければならない。また、世間は変えられないと思う人が多いのですが、それは一種の公共性ですから、自分の属している世間をひとりひとりが知れば、変えられないことはないはずです。日本人は、自分や自分の集団を対象化することが苦手で好みません。しかし、そこから、変化が始まると考えています。

集団的教養も大切に

最後に、アメリカでは、来世紀に若者の全てが高等教育を受けられるように財政措置を講ずるそうですが、日本の教育関係者は18歳人口の減少に併せて高等教育を減らそうと考えているようです。とくに職業制高校を減らす傾向が出ていますが、高等学校で重視するのはむしろ実技だと思います。ヨーロッパ人は、労働を悪だと思っている面がどこかにあり、12世紀以来、学問と体を動すことを切り離してしまいました。日本人は違います。失われつつある知恵や技術といった集団的教養と近代的教養を全く分かれたものにしないようにするべきだと思います。

（文責編集者）

新しい映画史を考える

▼セクション演習

A. 映画史の中のアジア映画
明治学院大学文学部教授　四方田　犬彦氏

B. 映画（館）と音楽
―戦前の日本映画を中心に―
東京工業大学大学院社会理工学研究科助教授　細川　周平氏

C. 映画論のトポロジー
―映画を論じることの歴史を／に学ぶ―
早稲田大学文学部助教授　武田　潔氏

D. 映画史の二つの面
―物質と想像―
埼玉大学教養学部助教授　小松　弘氏

［運営委員］
明治学院大学文学部教授　宇波　彰氏
埼玉大学教養学部助教授　小松　弘氏

［参加者状況］
50名、18校（男子19名・女子31名）京都（6）、明治学院（5）、一橋・立教（3）、東京・慶應義塾・東京女子・早稲田（2）、筑波・東京外国語・東京工業・横浜国立・国際基督教・成蹊・聖心女子・専修・中央・日（1）、その他（15）

「新しい映画史を考える」をめぐって

明治学院大学文学部教授　宇波　彰

映画史の歴史はわずか100年にすぎない。映画は大衆の娯楽としていままで大きな役割を演じてきたが、単に娯楽であるだけではなく、政治とも絡んで、時にはプロパガンダの道具としても使われてきた。今日では、おそらくテレビの発展とともに映画の影響力は次第に小さくなってきたようにもみえる。実際に映画館で映画を見るひとの数は、テレビやレンタルビデオなどの影響もあって、以前に比べてはるかに少なくなっている。また、映画の撮影技術の変化にともなって、映画の質そのものにもかなりの変化が見られるようにも思われる。

しかし、そのような状況があるにもかかわらず、映画が、現代人の生活と考え方に計り知れないほどの影響を与えてきたことは改めていうまでもない。ところが、このように大きな意味を持つ映画について、趣味的に面白いと言ったり、俳優についてのうわさ話を楽しんだりすることはあっても、歴史的・理論的に映画を考える作業がわが国で十分になされているとは考えにくい。われわれが、共同セミナー「新しい映画史を考える」で目標としたのは、このような状況を批判的に意識して計画されたものである。

このセミナーに協力された講師の方々は、いずれも現代のわが国の映画批評・映画理論の領域の第一線で活躍されている人たちであり、おのずからその言葉には熱がこもり、いたるところでパッションが感じられたはずである。参加者の方々も何らかの点で映画に深い関心を持っている人たちばかりであったから、熱心に講師の話に聞き入り、討議の場では、ときには白熱した議論が展開された。アトラクションとして珍しいエイゼンシュテインの映画の上映もあり、さらに講師を中心にして参加者相互の話が夜遅くまで続けられたのも当然の結果であり、参加者は大きな満足を抱いたはずである。これからも、映画・テレビ・写真・テレビCMといった、現代的な映像をテーマとするセミナーの開催が期待される。

参加者の感想から

○他大学との交流が持てたのがよかった。
○初めて参加させていただいて、たいへん勉強になったと思います。映画に関する知識や、見た映画の本数がまだまだだという程度で、今回のセミナーの講義を聞いて、分からないところがたくさんありましたし、質問らしい質問もできなかったけれども、よく励まされたような気がします。非常によかったです。
○学生のみなさんも先生方もすごく若くて、真面目で、鋭くて、とても魅力的です。全体の雰囲気もすごく好きです。
○緑の豊かな静かな場所で考える時間がもてたことを幸福に思いました。
○映画というものを、これほどまで情熱をもって探求している教授、助教授の話、討論、そして周りの人々と話す機会があってとてもよかった。参加してとてもよかった。
○いろいろな所から来た人々と映画について語り合うことができてよかった。すばらしい先生たちのお話を聞け、身近に接することができてよかった。
○ずいぶんたくさんのことを見聞きしたので、これを自己消化するように努めたい。
○すげーおもしろかった。先生を含めての飲み会が用意されていればよかった。
○みんなとてもいらんなことを知っていて、私は何も知らないということを感じたし、もっと勉強しようと思った。
○映画にあまり詳しくないのに参加したので少し参加者のなかに入りこめない面があったのも事実です。が、やはり皆で学びあう場というのは、とても楽しいものです。

教える授業から学ぶ授業へ

▼講演

教えることと育つこと―授業のモデルの観点から―
国際基督教大学大学院教育学研究科教授
中野照海氏

▼提題

大人数教室で学生参加を促す法
亜細亜大学教養部教授　栗田充治氏

大規模クラスにおけるグループワーク
―私の授業経験から―
慶應義塾大学総合政策学部教授　草野　厚氏

プロゼミ（一年入門ゼミ）の可能性
和光大学人文学部教授　佐治俊彦氏

知的感動への刺激―私の授業体験から―
東京女子大学文理学部教授　福田一郎氏

【参加者】 54校77名（講師運営委員をのぞく）
東海(5)、松山(4)、芝浦工業(3)、淑徳・東京薬科・東京理科・武蔵工業・玉川・神奈川工科・藤田保健衛生・大阪工業・大阪産業・徳山・日本文理・沖縄・東北女子短期・郡山女子大学短期(各2)、電気通信・東京外国語・東京学芸・東京農工・帯広畜産・東京商船・金沢・信州・長崎・東京都立科学技術・大阪市立・大妻女子・工学院・津田塾・日本・日本女子・明星・東洋英和女学院・北星学園・道都・北海道東海・郡山女子・聖学院・清泉女子・聖路加看護・大正・大東化・名古屋外国語・日本福祉・京都学園・同志社・大阪樟蔭女子・阪南・兵庫医科・高野山・比治山・武蔵野女子大学短期(各1)

◆

「教える授業から学ぶ授業へ」、この一見教育現場の実情からはるかにかけはなれたテーマと思われるような今回のセミナーに、全国から54校77名の大学関係者が参集した。これは切実なる教育現場の現状を認識した上で、少しでも授業を活性化させたいという意識の現れであろう。

セミナーでは、まず中野氏が教育工学の視点から教育における「教えること」と「育つこと」の相互作用についてOHPを駆使してわかりやすく解説した。その後、提題から分科会にかけて、より具体的な議論・意見交換が行われた。それぞれの分科会報告と参加者の感想から本プログラムを紹介したい。

第一分科会（栗田氏を囲んで）

実際の教育活動の情報交換を

亜細亜大学教養部教授　**原　一雄**

栗田先生を交えての分科会では、大人数クラスという現実の条件の中で、その教育効果を上げるために我々教員にはどのような工夫ができるのか、教え方の力量を上げるための活動という意味でFDを捉えました。

今回の5人の提題者が触れられた問題は、「学生参加型」の授業形態と、「放送大学型」ないし昔風のいわゆる講義法といったものに大きく分けることができ、それぞれに特色を持っています。また、学生側から見ても「問題意識」を高める学習と、基礎的な知識と技能という「基礎学力」を学習目標に設けるものに分けられます。前者は、まさに我々教師の存在価値は一体どこにあるのかという問題を突きつけており、後者はいわゆる大学のカリキュラムの機能は一体何かという問題であります。

それらの問題意識と、我々がぜひとも伝えたい、文化の伝達という機能とをどう一致させ、そこから新しい創造性を生み出すか。現在我々教員が置かれている状況を認識しながら、その中で最善を尽くすと同時に、その状況自体を改革すべく我々教員が何をなすべきかということも考えてなければなりません。そこに第三のキーワード「最適のクラスサイズの構築」という課題が残ります。それぞれの大学において教授会の場や、同僚の間で実際の教育活動の情報をできるだけ交換し、協力しながら、授業を本当に意味あるものにしていく努力が必要ではないだろうかということを語り合いました。

第二分科会（草野氏を囲んで）

グループワークにおける教師の役割

立教大学文学部助教授　**佐々木一也**

第二分科会では、草野先生を中心にしてグループワークの手法と、それが持つ大学教育においての意味について活発な討論がおこなわれました。グループワークについて一番大きな問題としてクローズアップされてきたのは、教師の大学教育における役割です。学生に対して自分の学問を正面から訴えるだけではなく、学生の自主性に任せ自主活動の中で学問のきっかけをつかませることがグループワークであり、それをどう演出するかという役割を教師が担うことが大事だということになりました。

その際、学生の意欲とは何か、それは存在するのかについて話題になりました。もし学生の意欲があるとしても、グループワークをすればうまくいくわけではない。その成果を競争させるコンテストをすると、グループワーク自体が自己目的化していく。学生は、みんなとわいわいやるのが楽しくてのめり込んでいくこともあります。すると、レクチャーの定着が期待したほどでもないケースも出てきます。

グループワークは学生に任せるのだから教師は楽だろうと思いきや、全くそういうことはありません。教師が期待した方向に、学生が動いているかどうかを常にチェックし続けなければいけませんし、はずれたと思われたときには適度に介入をして修正しなければならない。その際にどの時点ではずれたと認定するか、どれほどそのグループに介入すればそのグループが教師が思い描いている「正常な状態」にもどるのかという判断が大変難しい。ケースバイケースなので、教師はグループワークに関われば仕事は限りなくあり、負担は限りなく増えていきます。グループワークでは教師は裏方、草野先生の表現でいえば仕掛人であるということです。しかし、その仕掛けとは大変奥が深いものだと感じました。その辺を学生の意欲とのかねあいでどう計っていくかがグループワークの問題ではないでしょうか。

第三分科会（佐治氏を囲んで）

初年次ゼミで学生の主体的学びはどう可能か

東京農工大学農学部教授　**亀山純生**

この分科会では、まず第一日目に初年次ゼ

ミに携わる上での悩みや問題点を率直に出し合うこととところから討論を始めた。

その論点の第一は、どこでも初年次ゼミで学生の"食いつき"が悪い、つまり積極的能動的態度をとれていないことであった。討論では、その基本的背景として偏差値で輪切り体制の問題が改めて確認された。

第二は、学生の受動性の背後に大綱化以後の大学のシステム・カリキュラムの変化が関係していることであった。この点は、大学科システムの大学や、初年次ゼミを専門教育のプロゼミと位置づける大学から深刻さが指摘された。大綱化が専ら自由（恣意的）選択と誤解されて学習の系統性の解体、また、かって存在した、上級生から下級生への履修情報伝達の機能の喪失などが浮き彫りにされた。

第三に、初年次ゼミにおけるモチベーションのポイントは何かという点である。これについては初年次ゼミの位置付けの相違（教養ゼミか専門のプロゼミか）によって微妙な差があった。しかし共通して指摘されたのは、ある先生の表現を借りれば、「受験教育の過程で設問と回答がワンセットにインプットされている学生の思考構造をリセットして、設問に対する多様な回答への回路をどう用意するか」であった。つまり、学ぶこと及び学び方を知るという問題に基本があり、それと本の読み方や文献検索の仕方など「知の作法」の習得の結合の意味などが提起された。

これらを受けて、各大学での初年次ゼミの実施形態とカリキュラム上での位置づけについて詳しく情報交換と整理をした。（選択必修、ゼミの性格、担当者の形態など）。それを踏まえて、初年次ゼミのカリキュラム上での位置付けとその保証としてのシラバス・授業評価について討論された。そこでは、これらがまだ教員管理の方法と誤解されたり逆に形骸化していることの問題性が指摘された。さらにより本質的な問題として、双方向授業の典型である初年次ゼミにシラバスや定型的授業評価システムは本質的になじまないとの問題提起があり、この点を巡る討論の中で、授業評価とはそもそも何なのかが改めて問われるべきだということで時間切れになった。この論点、学びの主体的意欲の形成をめざす学生との共同作業的授業とその評価の関係が、第三分科会からの最大の問題提起であると言えるように思われる。

第四分科会（福田氏を囲んで）
学生が知的感動を持つために
電気通信大学電気通信学部教授　**中田良平**

第四分科会では、福田先生に提題の補足説明をいただき、学生の感動や刺激の問題について参加者から報告いただきました。

そこでは、学生に知的興味、あるいは好奇心・感動を与えるには大きく分けて二つの方法が出されました。一つは、我々教官が研究や会社での体験を通して感動を与える。もう一つはいわゆる方向付けです。また議論の中で、卒論を通して持つ充実感が学生たちにいい刺激を与えるのではないかという意見が出ました。この体験は、社会に出たり大学院に進学した後に非常に影響を与えるのではないだろうか。このようなことから、卒論をどのようにおこなっているかについて参加者から報告をいただきました。

その中で一つ面白い事例がありました。そこでは、卒論のために研究室を決めるのは学生ですが、その後は強引に枠にはめて訓練をする。その結果、非常に感激を味わう場合があるそうです。発想としては、薬学部や看護学科のようにある種の目的を与えて強引に枠にはめてしまう方法です。これも一つの方法ではないかという印象を受けました。

いずれにしても、理科系は文化系と違い先細りです。受験生が実際減っています。そこで理工系に対する知的好奇心・感動をできるだけ早い時期に体験して欲しいということで、大学教員が小中学生に対して実験などを通じて知的感動を伝える状況になっています。大学生に対しても、入学した時点で大学生としての自覚を持たせなければ、節目もなく大学3・4年になってしまうという指摘もありました。

第五分科会（総合討論）
大学教員の悩みとFD
千葉大学園芸学部教授　**山内正平**

この分科会は提題者がおりませんので、出席された先生たちの授業現場での問題をお話していただいた中から浮かんできたことは、多くの先生方は精神的・肉体的に疲弊した状態で授業をしておられるという悲しい現実でした。その背景には、大学だけでなく、それを取り巻く社会も未来への展望を持てないでいることもあるのではないかという指摘がありました。個々の大学教師だけがどのように努力すればいいかという問題ではないし、まして教育技術の問題だけではないと私自身は感じました。

「教える授業から学ぶ授業へ」というテーマですが、学ぶという以前に、まず学生と教師の人間関係をどう作っていくのかという問題があります。多くの先生がそれをお感じになっています。分科会の中でもご発言ありましたが、今まで研究者として研究したきたものと教育の場で要求されているものとは違っています。しかし教員として採用される際に「この大学ではこういう授業をおこなおうとしている」、「こういう風な教育をやってほしい」というような説明が大学側からほとんどない。そうすると先生方は個人的に悩むしかありません。こうしたらいいんじゃないかと努力するけれども、それもうまくいかないで、また悩む。結局、個人の苦悩と努力にしか任されていないのが実体です。

ファカルティとして、入学試験のあり方も含めてどういう学生をがこの大学に入学させようとするのか、その学生が大学に入学する以前に、どういう学びの営みをしてきたかを当然把握していなければいけない。しかし、それができていないのではないか。つまり、ファカルティが大学で形成されていない。学部、学科は一人一人の寄り合い所帯で、ファカルティという組織体は、実は形成されていないのではないか。すると当然、このプログラムの場でおこなっているFDのD(Development)までいけないわけです。FがないのにどうしてDがでてくるのか。それぞれの大学の場に帰ったときに、FDが成立しない理由が見えてきた気がいたしました。

参加者の感想から

●学生たちを主人公にする方法を求めて
日本女子大学家政学部専任講師　**坂田　仰**

「教える授業から学ぶ授業へ」、私が今回参加したセミナーのテーマである。要約すれば、教員が主人公の授業から学生が主人公の授業への転換ということであろう。それは、教えを受ける立場として位置づけられがちな学生を、自ら主体的に学ぶ学習者として位置づけることであり、誰にも異存のない考えである。

しかし、学生全員が自ら学ぶ授業への転換は

果たして可能なのだろうか。無理かもしれない。これが私の率直な思いである。理由は、ここ数年学生のタイプが大きく変化している点にある。私が学生生活を送ったのは八〇年代初頭。その時の常識が通用しない学生が確実に増えているように思えてならないのである。

この点を意識するようになったのは、ある大学に出講した際、講義に出席しながら、最初から最後まで私語を続けている学生達に出会ったときのことである。彼らには、「講義中は静かにするもの」という意識は全くないように思えた。しかし、私の出席もとらない授業に毎回欠かさずやってくる。そして、悪びれた様子もなく、友人との会話を楽しんで帰っていくのである。

講義の際に私語をする。それは、講義に耳を傾けようとする学生に迷惑をかける。だったら出席もとらないことだし、授業に出なければいい。この「常識?」が全く通用しない。意を決して注意をすると、なぜ注意されるのだろうかと怪訝な顔をされる始末である。

「大学なのだから自分の興味や関心に合わせて授業を選択しているはずだ。きっと授業のやり方が拙いに違いない」、「そんな学生には単位を与えなければいい」。こんな批判が寄せられることと思う。しかし、そう簡単に終わらせてしまってよいのだろうかと思う。

進学率の上昇は、学生の質を大きく変化させることになった。「大学は学問のためにある」というある意味で大学教員には自明の考え方。この考えが、「建前」としてすら通用しない学生が急激に増えているとは考えられないだろうか。

友人との会話を楽しむために講義に出席する学生。このタイプの学生を前にして諦めることはたやすい。しかし、それでは教員になった面白味がない。この学生達を授業の主人公にする方法はないのか。その思いに駆られて、今回の研修に参加することを決めた。

一般教養科目と専門科目、必修科目と選択科目、文科系と理科系の違い。そして何よりも入学してくる学生の資質。講演会や分科会で提示された様々な手法をそのままの形で利用することはできない。しかし、同じ悩みを持つ教員が他にもいることを知ることができた。何百人という学生を前にして、孤独な戦いを続けていくための大きな糧を得ることができた思いである。

●大学教育に携わる一人として

大阪工業大学工学部助手　**倉前宏行**

私は、今春大学院博士後期課程を終了し現職に着任した。したがって、大学教育を受ける側から教える側へ180度転換したばかりである。着任早々、4月から1科目4コマ（I部、II部を含む）、後期からは2科目8コマの演習形式の講義を担当し、四苦八苦の連続である。そもそも大学教員という道を選んだのは、あまり制約を受けずにこれまで行ってきた「研究」を今後も続けていきたいと考えたからであり、大学における「教育」に対してはそれほど強い興味が無かったというのが正直なところである。このため、突如教壇に立つ立場になったとたん、右往左往する羽目になったのである。そんな中、大学からの推薦を受け、1泊2日の本プログラムに参加させていただいた。

私の専門分野は計算工学・情報システムであり、講義も経営工学の情報・コンピュータに関する科目を担当している。工学系の専門科目は、多数の基礎科目の積み上げによる大系として成り立っており、積み上げの過程における授業は「教える」ということが不可欠である。しかし、こうした基礎的な積み上げすら満足に行われていないというのが現状ではないだろうか。自分の学生時代を振り返っても、本来の目的である「知識・教養」を積み上げることよりも、卒業用件に必要な「単位」の積み上げに必死で、とにかく体裁を整えてレポート課題を提出する、試験で合格点を取ることに終始しているように思われる。したがって、普段の講義中においては「自ら学ぶ」という姿勢が現れず、「学ぶ授業」が成立するはずもない。この結果、試験で合格点を取り単位を修得したとしても、その授業科目の内容が学生自身の中で消化され、きちんと身についてないのではないか。

こうした現状の中で、たった1泊2日で「教える授業から学ぶ授業へ」という大問題を解決する手段が見つかるはずもないが、大学教育に携わる一人として、深く考えさせられるきっかけとなった。講演や分科会において先輩諸先生方の貴重なご意見・ご討論を拝聴し、これを今後の教育活動に生かしていきたいと考えている。

●カウンター・カルチャー・ショックと日本と英国における教育体験

日本大学／芝浦工業大学非常勤講師　**門倉弘枝**

12年間の英国滞在後、今年の4月に帰国し日本の大学に復帰した私は、現在の日本の教授法に戸惑いを感じていた。そのような折りに「教える授業から学ぶ授業へ」というテーマで、大学教員研修プログラムがあることを知り参加した。その結果有意義な講演と、各先生方が体験授業をお話下さり、日本の教育の現状のある一部を知ることができた。それは私が日頃感じていたことの再認識でもあった。

英国での教授法は自主的学習法(autonomous learning)」が主流で、その方法を徹底的に訓練され、またサセックス大学で日本文化社会と外国語としての日本語を任され、自主的学習法で対処し、幸い学生たちからも同僚からも好評を得ていた。したがって、日本の教育方法に対していわばRe-entry cultureshockで悩まされている「個」である「私」を越えて、大学、社会、日本の教育制度などすべてが関わり合っていることが明らかになったのである。しかしながらまだよく理解できないことは、大学も学生も千差万別であるが、なぜ日本ではこの自主的学習法がここで討論されているにも拘わらず、日本の全体に根付かないのだろうかということである。それはごく少数の人々のみが意識的に気づいているにすぎず、時期を待たなければならないのか、もしくは日本の文化社会そして歴史的に根強い考え方から抜け出せずにいるからなのか。または、やりたくとも現状では許されないからなのだろうか。そして、日本の小・中・高等学校での教育の在り方と、大学と社会との関係も大きく影響しているに違いないであろう。答えは、これら全部が絡み合っているのかもしれない。とすれば、現在のところは個人レベルでよりよい方向にもって行くより仕方なさそうである。

前期中に試みた私なりの日本でautonomous learningが、学生たちに対するアンケートの結果では、まだ不十分ながらも彼らに喜んで受け入れられてきていることがわかったので、それを発展させ日本の大学生にあった方法で取り入れているのが、私の現在の状況である。その意味において今回のセミナーは、現状の認識と日本の大学の方向が少しではあるが見えてきたように思え、大変有意義であったと感じている。

入試と就職、そのはざまにある大学

▼講演

大学と社会
一橋大学学長　阿部謹也氏

▼パネル・ディスカッション

1. 高校から見た大学入学試験問題について
東京都立西高等学校長　槇　學氏
2. 大学入学試験の改善
中央教育審議会委員・メディア教育開発センター所長　坂元　昂氏
3. 就職ニーズと大学専門教育について
—大学教育と社会発展の関わり—
前会津大学長・福島県顧問　國井利泰氏
4. 経済社会の変化と人材育成
日本経営者団体連盟教育部長　田中宣秀氏

【運営委員】

武蔵工業大学工学部教授　安田忠郎氏
東京工業大学理学部教授　北原和夫氏
大妻女子大学社会情報学部教授　田邊和子氏
神奈川大学外国語学部教授　松山正男氏
筑波大学大学研究センター教授　山本眞一氏

【参加状況】

29校45名（講師・運営委員を除く）
東海(6)、芝浦工業(3)、電気通信・中央・東京理科・日本・武蔵工業・東京学芸・東京工業・東京農工・青山学院・工学院・国際基督教・上智・成蹊・聖心女子・東京工芸・東京薬科・日本女子・明星・獨協・恵泉女学園・順天堂・大東文化・神奈川工科・阪南(各1)、防衛(3)、都立竹早高校、県立千葉東(各1)、ベネッセ(2)

◆

近年、大学のあるべき姿について、大学人や教育関係者だけでなく、政財界その他様々なところから、非常に多彩な提言が数多くなされてきた。それらの全てが必ずしも大学自体の問題とは言えないが、大学および大学人は、それらを社会的要請として受け止め、理念から具体的な教育方法に到るまでの改革の議論を重ね、試行錯誤をくり返してきた。そして、今は、その大学改革がもたらした現状について、再び大学が再検討の必要を認識し、さらなる改革を進めようとしている。

大学教員懇談会では、昨年は「大学、改革はしたけれど」と題して、行なわれてきた改革の現状と残された課題について多面的に検討をした。その結果、今回は教育の場としての大学の社会的責任の問題に限定し、具体的な「入り口と出口」つまり入試と就職を切り口として徹底討論することになった。

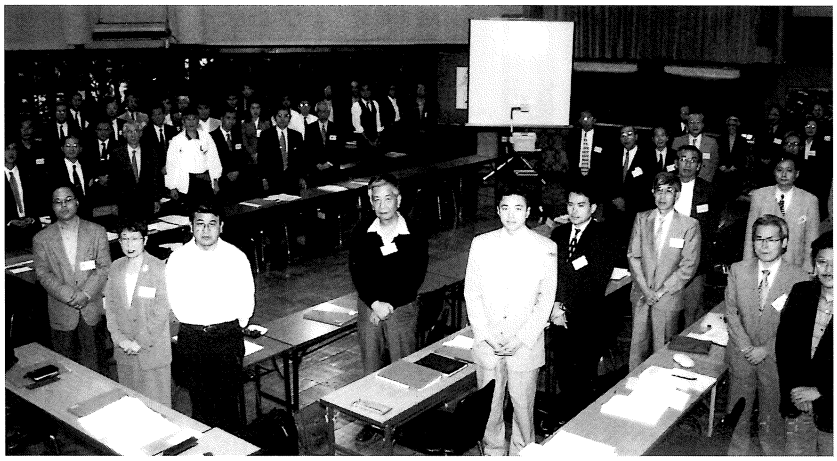
プログラムは、パネル・ディスカッションから始まった。まず、都立西高等学校長槇學氏から、弊害が指摘されることの絶えない大学入試について、率直な意見をうかがった。高校の教育内容と大学入試のそれとの隔たりが中等教育を歪ませ大学の学部教育を困難にし、センター試験以来の多様な試験方法が受験生を翻弄していると述べられた。

また知識要求型の入試や、入学者を選抜するということが、一般に若者の風潮といわれている無気力や人間関係の希薄、学生の思考力の欠如などの一因になっているのではないかと問題を提起した。その上で、最近の大学側の知識要求型からの脱却への努力を評価するとともに、それをいっそう進めて教科の枠を取り払った総合科目によって受験生をトータルに見ること、入学選抜ではなく、入学資格にすることなどを提案された。

次に中央教育審議会委員の坂元昂氏からは、審議会の大学入試の改善策について、審議会では第二次答申の「生きる力」の概念を基本に大学教育の多様化を提案している。それを承けて、大学入試の方法の多様化と知識変偏重からの脱却が、実際に大学入試センターや個別の大学で図られていると述べられた。大学の入学者選抜の現状と、今後のあり方について詳しい説明があった。先の総合科目の提言には賛意を表明されたが、足切りの一般化となる可能性があると指摘するなど、入試改革をめぐる代表的ないくつかの意見について賛否を論じられた。

そして、就職については、就職難といわれている今日でも企業からの求人率が高い会津大学の前学長國井利泰氏から、社会の要請に大学がどのように応じるかについて、体験に即して意見をうかがった。國井氏は、会津大学がコンピュータ・ネットワークの高度化に対応する人材を育成する教育内容と併せて、教員組織の国際化、学生チューターを活用した授業や教育・研究におけるネットワークなど、日本の大学では非常にユニークな実態をご紹介くださった。

最後に、日本経営者団体連盟就職部長の田中宣秀氏から就職協定廃止の狙いを含めて、今後の企業の求める人材、および新卒者の選抜方法についての報告をいただいた。10年もの間、実際には守られてこなかった就職協定の廃止は、採用活動がオープンになるということで、学生の就職活動が単純に早期化するとはいえない。また、就職活動の長期化の懸念については、通年採用やインターン制など企業の採用活動は多様化してきている。就職活動が学生の学業を阻害することはなく、むしろ企業と学生は、過重な負担がなく最適なマッチングをすることになると述べられた。



そして、現在の大学教育については、企業が求める人材という観点から、厳しく学生を評価し、「出口」の質を管理して欲しいという注文が出された。

各パネルのあとに、参加者から質問があり、特に槇氏の率直な発言に対して、大学教員の中からは賛意とともに、より詳しい意見を伺う質問が続出した。坂元氏の発題については、試験科目数を増やすことでバランス良い学習を実現させることができるのではないかなど、弊害の少ない入学試験の諸方策についての意見交換となった。また國井氏、田中氏の発題についても、質問の手が上がったが、プログラムの進行の都合で十分な質疑応答を行なうことができず、参加者からは講演時間を増やして欲しいという不満も出た。

その後、プログラムは講演に移り、一橋大学長阿部謹也氏より、「大学と社会」をテーマに、ヨーロッパで大学が誕生してから今日に到るまでの大学と社会の関わりの変化、および近代日本に誕生して以来の日本の大学の特質について、具体的実証例を豊富に取り入れて論じた。大学と社会との関係がどうあるべきかよりは、むしろどうであったかを述べることで、阿部氏は自身の大学と社会がどうあるべきかの考察を示した。参加者のほぼ全員が深い感銘を受けたと感想を残している。（講演内容は、本ニュース「巻頭言」をご覧下さい。）講演のあとは、夕食を経て、パネルの講師を囲んでの分科会に移った。今回は、テーマが入試と就職ということで、大学事務職員から9名、また高校教諭から2名の参加があり、大学教員とともに本音で活発に意見交換があった。このような機会は、貴重であったようで、参加者からは、大学教育に関わる様々な人たちと積極的に意見交換をしたいという感想をたくさんいただいている。翌朝の総括討論でも運営委員の分科会報告に次いで、参加者から様々意見が出されて盛会となった。

（詳しくは、第34回大学教員懇談会記録で報告いたします。6月刊行予定）

今後、中等教育と高等教育の連携、大学と企業との教育・研究の協力は、さらに強まる。大学教員懇談会は、大学教員が大学を取り巻く様々な人たちと率直に意見交換する場としての役割も担うようになるのではないだろうか。

大学教員懇談会に参加して

県立千葉東高等学校教諭　**大谷芳孝**

講演や分科会は密度が濃く、感銘を得るものでした。高校教員の参加が少なく参加をためらいましたが、参加して良かったというのが本音です。本音といえば、大学の先生方が本音で発言されたのも印象的でした。

当日は発言できなかった私が勤める高校（全員が進学希望）の現状の一端と私見を述べさせていただきます。

高校入学時の生徒は今まで入試勉強をしてきたので、骨休みしたい気持ちが強くあります。また、自分の意志が発揮できる部活動に熱意を燃やそうとします。学校の授業は多くは講義式で自ら学ぶ場はあまりありません。まあ勉強するのは予習が厳しく課せられる英語くらいで、あとの教科はほとんどせず、1、2年が過ぎます。教員は受験を考えて授業進度は速く、普段の家庭での学習がないと落ちこぼれます。1、2年で予習や復習をしっかりやれば、3年になって特別に受験勉強をしなくてもいいのですが、多くの生徒は3年になって腰を上げます。しかし、時すでに遅く、1、2年次に描いていた志望大学は、夢のまた夢になります。本校の生徒もかなりの生徒が自分の志望ではない大学に妥協して入ることになります。

私たち高校の教員は、このような状況に置かれている生徒にどう接し、彼らの行く末にどうささやかな灯りを点せるのか、困難と悩みは大きいものがあります。

知的好奇心が旺盛な年頃の生徒に対して、「これはなぜか」と考えさせる教育が中等教育では特に求められていると思います。この態度が育っていないと、高等教育には適応しにくいのではと思います。進路指導という立場と教科の指導の立場から、私は、改めてこのことの重大性を最近強く感じています。

この態度の養成はゆとりのある環境の中でこそ可能です。それはなによりも土曜日の授業を減らすなどというのではなく、1クラスの生徒数を減らすことです。また、大学入学試験の改善も重要であることはいうまでもありません。これらの改善への壁は厚いものですが、たとえば考えさせる授業は今の制度の下でもある程度可能です。それらの実現なくしては日々成長する生徒たちの期待に答え得ないと思います。

地球市民になろう
—環境破壊・戦争・貧困・民族紛争の解決の道を探る—

国際協力事業団無償資金協力業務部フォローアップ課職員　島田　剛氏

今回のセミナーの募集要項に書かれた主旨文は以下の通りである。

私たちが生きてきた20世紀を、何世紀も後の未来の人たちは、どんな時代と呼ぶのでしょうか。〝地球環境破壊を始めた世紀〟と呼ぶのかもしれません。ヒロシマ、アウシュヴィッツ、そして第一次・第二次世界大戦のあった〝大量殺戮の時代〟と呼ぶのかもしれません。

実際、20世紀が終わろうとしている今日、人類の前には、環境破壊・大量破壊兵器・貧困・民族紛争・抑圧など多くの深刻な問題が立ちはだかっています。もし私たちがこれらの地球的問題の解決に失敗するならば、21世紀は恐怖と不安が支配する暗い時代となり、20世紀は人類の絶望が始まった時代として記憶されることになるでしょう。

しかし、20世紀は希望の種子がまかれた時代でもあります。平和を維持・創造するために国連が創設され、世界各地で市民が環境破壊行為を告発・阻止し、貧困や飢餓をなくすための国境を越えた援助活動が幅広く行われ、ガンディーやキング牧師の非暴力行動が武力を用いた抑圧にうちかった時代でもあります。

このセミナーは、21世紀をつくる主人公である若い世代の人たちが、地球的問題の現状と原因を探るとともに、平和で公正な人類社会を実現するためには今だれが何をなすべきかを論じ合うことを目的に企画されたものです。

多摩丘陵の秋の雑木林に囲まれたセミナー・ハウスでの、2泊3日の、様々の大学からの参加者や講師との語らいを通じて、地球市民として生きていくための知識と自信と連帯意識を手にいれて下さい。

この呼びかけに北は東北から南は広島まで31校96名の学生が参加して、10名の講師・パネリストとともに2泊3日の合宿セミナーは行なわれた。

「地球市民になろう」という大きなテーマに切り込むために、参加者は5つのセクション演習に分かれて少人数で議論が進められた。その中のBセクションでは、セミナー・ハウスに近い多摩動物公園でのフィールドワークを行ない、実際に動物園で働く人の話を聞くなどして問題意識を深めていった。

セミナー終了後、セクション演習について学生はこのような感想を書いている。

○講師に近い距離でより具体的に話し込めたのがよかったです。

▼セクション演習

A. 戦争は不可避か
　東京大学大学院総合文化研究科教授　油井大三郎氏

B. 「動物園」から考える環境問題と私達の生活
　神戸大学大学院国際協力研究科教授　ロニー・アレキサンダー氏

C. 民族共存のあり方を求めて
　早稲田大学政治経済学部教授　伊東孝之氏

D. 貧困の罠からの脱出—「持続可能な発展」を求めて—
　恵泉女学園大学人文学部教授　石井摩耶子氏

E. 非暴力は世界を変える
　東北大学法学部教授　大西　仁氏

▼パネル討論

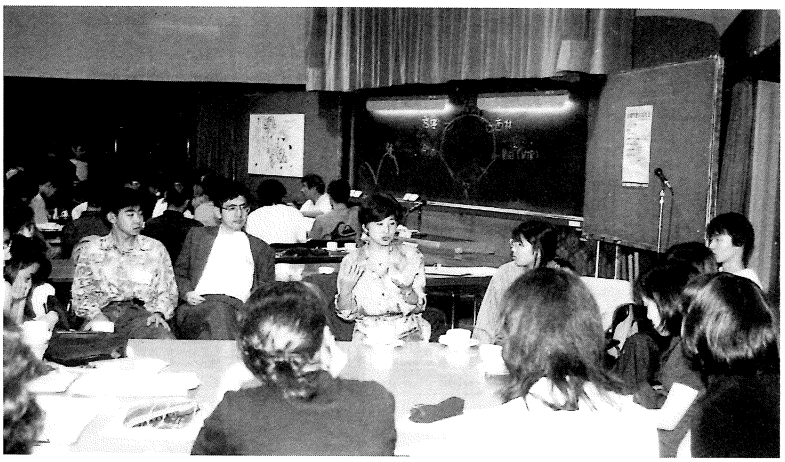
1. ボスニア難民支援にあたって
　元UNHCRベオグラード広報官、元フジテレビ記者　西村洋子氏
2. 開発援助と私
　開発援助コンサルタント、元在ケニア日本大使館専門調査員　鈴木郁子氏
3. 現地で必要とされる協力活動とは—地域環境保全ブームの中で—
　NGO「サヘルの会」事務局員　高津佳史氏
4. 地球市民として—恋愛と同棲のススメ—
　元シャプラニール事務局長、元国際赤十字バングラデシュ駐在員　大橋正明氏
5. 仕事としての国際協力

【参加状況】96名31校（男子52・女子44）
東北(28)、中央(9)、早稲田(8)、筑波・慶應義塾(各5)、神戸・東京薬科(各3)、一橋・帝京・恵泉女学園(各2)、千葉・電気通信・東京学芸・東京工業・横浜国立・広島・東京都立・静岡県立・青山学院・成蹊・成城・東京女子・東京理科・日本女子・明治学院・立教・玉川・フェリス女学院・モンタナ・東京都社会事業学校・東京商科学院(各1)、その他(8)

平和学会が中心となって企画したセミナー

今回のセミナーは、日本平和学会が「平和学」について学生に興味・関心をもってもらいたいという希望を大学セミナー・ハウス主催の「大学共同セミナー」として行なった。

その企画に関しては、平和学会に所属する恵泉女学園大学の石井摩耶子先生、早稲田大学の伊東孝之先生、東北大学の大西仁先生の3名が中心となってセミナーの構成、講師の人選と交渉などを行なった。また、参加学生の募集については、通常のセミナーと同じように大学セミナー・ハウスの会員校を中心とした各大学にポスターや募集要項などを配布したり、平和学会に所属する教員に授業の中で紹介してもらうなど全国的に募集を呼びかけた。



○普段友人とも話さないような話題を、みんなで真剣に話し合えたことをとてもうれしく思う。
○少人数の中で自分の意見を言ったり、他者の意見を聞く本当によいチャンスでした。
○今後もっと、この問題について自分なりに考えていきたいというきっかけになることができて良かった。

また、二日目のパネル討論では、国際機関やNGOで実際に現場の活動に携わったことのあるパネリストを招いて、より具体的な話を聞くことができた。また、パネル討論の後半では、それぞれのパネリストを囲んでコーヒーを飲みながら質疑応答の時間を設けた。ここで参加者は、以下の感想のように、リラックスしながら思い思いの質問をぶつけることができたようだ。

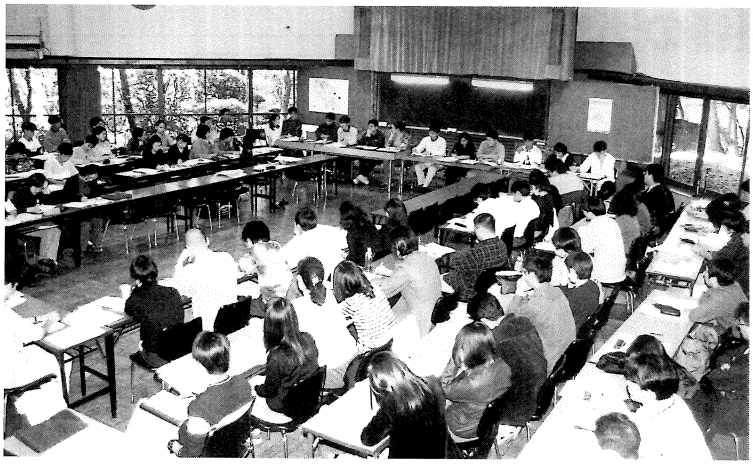
○NGOで働く現場の人たちに直接疑問をぶつけることができて良かった。また、他の人の質問を聞くのもなかなか刺激があった。
○NGOなど様々な組織において現場で働いている方々の生の声は、単なる論理などよりも現実の問題として深く心に残った。
○セクション演習だけだったら、机上のみで大学の延長になっていたと思いますが、実際現場で働いている人の話を聞くことで、現場に近い視点で現実の問題を見ることができて良かった。

最終日の総括討論は、学生の司会により、各セクションでの議論の報告をもとにしながら大きなテーマである「地球市民」をめぐって学生らしい意見が活発に飛び出した。報告者の中には「大人数の前で発表・報告することの難しさを改めて実感した」という感想を書く学生もいた。

セミナーを通じて参加者は、それぞれのテーマについて問題意識を深めると同時に、議論することの楽しさを実感したようだ。以下に掲載されている参加者の感想からでもわかるように、今回のセミナーの主旨は達成したように思われる。このセミナーの成功を受けて、平和学会でも来年も同じような企画を行う予定でいる。大学セミナー・ハウスでは今後もこのような企画に協力していきたいと考えている。

参加者の感想から

○始めて参加して、いろいろ学ぶことも多かったです。もう3年生ですが、もっと以前にこのようなセミナーの存在を知っていればと思いました。
○これだけ多くの多彩な人々と議論をし、話を聞くことが出来て、とても貴重な体験だったと思います。自分なりに考え、出来ることから行動していく勇気がわきました。
○他大学生との交流、他大学の講師との交流は滅多にない機会ですので価値がありました。いろんな人がいて、いろんな考えがあるのだと改めて感じました。
○地球市民の自覚をより一層高めることが出来た。特に他大学生、社会人の人達との交流が良かった。
○新しい友人がたくさんでき、また彼らと議論することで脳ミソに刺激を与えることが出来、さらに先生方、NGO関係者等と接することが出来たことにとても満足しています。秋色に染まる森林、心地よいそよ風、虫の鳴き声・・とても良かったです。すごく良い環境だと思います。
○大学1年で、ゼミも受けたことがない状態で、しかもいろいろとまだ勉強していないときに、こういう風に教授とも同じ立場でディスカッションをして物事を考えるのはすごく刺激的だったし、ためになった。
○テーマに関して明確な答えは得られなかったけれど、色々な学生と時には真剣に、時には楽しい話題で盛り上がれたのがとても楽しかった。
○他大学、あるいは社会人の方と色々話し合えたこと、そしてこれからの世界を考えていく上で自分の中であらゆる問題意識を深めることが出来たのは私にとって大きな収穫だったと思います。
○朝から晩まで皆と同じテーマ（全体としてはいくつかあったが）について考え、話し合う機会は今までにないことで、今後いい思い出になりそうだと思った。
○ハードなスケジュールでしたが、一つ一つのプログラムは充実していて得ることが多かったです。このセミナーにおいて私は常に与えられる立場でしたが、このセミナーの裏側では多くの方の努力や協力があり、本当にお世話になり、ありがとうございました。
○時間的にとてもハードでしたが、いろいろと考えさせられました。簡単に解決のつかないテーマで、さらに今後考えるべきことが増えたという感じですが、これから自分の専攻を深めるスターティングポイントを沢山もらいました。様々な人の意見が聞けました。皆さんが非常にまじめに熱心に自分の考えを話してくれて、非常に有意義な3日間でした。



平成9年度 第2回共同セミナー委員会
'97年10月30日／アイビーホール

【出席者】宇波彰、伊藤正直、伊東孝之、佐伯胖、松井孝典、山中速人、吉見俊哉、市村禎二郎、岡館長ほか企画室スタッフ2名

●主な議事

第173回大学共同セミナー「新しい映画史を考える」、第174回大学共同セミナー「都市と視線ー塔からバーチャルリアリティーまでー」、第175回大学共同セミナー「地球市民になろうー環境破壊・戦争・貧困・民族紛争の解決の道を探るー」の実施報告、第176回大学共同セミナー「バブル崩壊後の企業社会とジェンダー」の準備状況、第177回大学共同セミナー「現代社会の理論（仮題）」、第178回大学共同セミナー「脱工業化社会の『見えざる社会問題』にどう迫るか（仮題）」、第179回大学共同セミナー「科学と社会（仮題）」第16回大学院共同セミナー「カルチュラルスタディーズ（仮題）」。

平成9年度 大学教員研修プログラム委員会

▼第3回 97年9月20日／大学セミナー・ハウス

【出席者】絹川正吉、原一雄、福田一郎、井下理、佐々木一也、建部正義、中田良平、宮腰賢、山内正平、蝋山道雄、小林志郎、丹羽泉、清水一彦、岡館長ほか企画室スタッフ3名

●主な議事

第14回大学教員研修プログラムの打合せについて、他。

▼第4回 '97年10月7日／アイビーホール

【出席者】絹川正吉、原一雄、福田一郎、佐々木一也、建部正義、中田良平、宮腰賢、山内正平、丹羽泉、岡館長ほか企画室スタッフ3名

●主な議事

第14回大学教員研修プログラムの打合せについて、他。

▼第5回 '97年10月27日／アイビーホール

【出席者】絹川正吉、原一雄、福田一郎、中田良平、宮腰賢、山内正平、小林志郎、清水一彦、岡館長ほか企画室スタッフ2名

●主な議事

第14回大学教員研修プログラムのアンケート調査の結果、第15回大学教員研修プログラムの企画、座談会「大学改革を斬る」の編集、他。

千人会
'97年9月～11月

◆ご入会ありがとうございました

◇荒川由美子殿
・尚絅女学院短期大学教授／A

▼会員数＝一、四一六名

◆会費ありがとうございました

長内了、田村恭、三輪公忠、松瀬貢規、内山尚三、鶴野省三、船山信子、田中弥寿雄、藤田淑子、宮野三郎、渡辺昭夫、本間正人、小沢重男、荻原洋太郎、福島正久、五十嵐香、岡村文子、荒川由美子、下田弘、山本武彦、沖塩荘一郎、國岡昭夫、村田光二、渡辺弘道、植林博太郎、猪瀬愼一郎、林勲、古賀正則、朽津耕三、野崎昭弘、島岡丘、山代昌希、出居茂、金谷憲、大蔵隆雄、石村善助、井手久登、麓信義、古屋野正伍、大澤綱一郎、田中栄、兵頭圭介、永井克孝、色川大吉、松本宏、鈴木俊和、稲垣寛、十代田知三、松田徳一郎、大東百合子、安嶋彌、岡村秀勇、並河一道、小堀桂一郎、横山宏、朝倉孝吉、吉原健吾、岡野澄、斎藤信房、鞍馬菊枝、平野健一郎、青柳清孝、尾形憲、関本昌秀、安達義明、久武雅夫、釜泡善一、塩見利夫、布施涛雄、奥田眞丈、東壽太郎、谷俊治、矢吹晋、松田千鶴子、今井淳、加藤一郎、高村多賀子、平野敬一、末松安晴、関口利男、木村富夫、小川信子、八木江里、板垣與一、川原栄峰、小林善彦、田村献、松岡八郎、長松昭男、飯田経夫、須田精二郎、末岡俊二、橋谷卓成、堀光男、米村貞蔵、池上秋彦、平澤茂一、大竹誠、大貫一、酢屋善元、高橋三郎、前川真理、貝塚爽平、篠嵜啓助、宮野彬、牧内操、久場嬉子、広内哲夫、岩下秀男、小田中敏男、江尻美穂子、藤井賢二、戸田盛和、荒川幾男、秋田成就、新田悟、宮田登、増田茂樹、福田隆義、井門富二夫、田島澄江、田村皖司、森岡清美、鶴岡義一、清水護、角尾稔、祖父江孝男、竹村憲郎、太田時男、宇野重昭、岸良範、伊藤玄三、坂井昭宏、松尾章一、久留都茂子、岩崎征人、斉藤孝、戸張よし子、吉武泰水、笹島恒輔、中野工、篠沢公平、小林澈郎、田端光美、末永國明、米山弘、森玲子、梶木隆一、國分康孝、小田滋、新井勝紘、米満澄、吉沢英子、高野雄一、神田信夫、森田信義、山下幸夫、熊川忠、木畑洋一、森田明、吉本昌司、近藤保、田村光三、村井資長、村上健、外池孝雄、小松八郎、伊藤修、小和田恒、水野伝一、青木生子、木下是雄、八杉貞雄、増田義男、笠井貴征

（敬称略）

◆千人会員のおたよりから

●私と同年同月生まれの同期で、セミナー・ハウスとも関係の深い増田四郎氏の急逝に接し、無常の風が痛く身に沁みる昨今です。「生死一体」「死生一如」の心の修行に励み、自分なりの死生観に辿りつくのはいつの日か（？）。

（一橋大学名誉教授・板垣與一）

●これからの社会において大学セミナー・ハウスの役割の大きさを思っております。

（日本女子大学教授・小川信子）

●おかげさまにて変わりなく元気で73歳を迎えました。別便にてささやかな漢詩集「華英集」をお送り致しました。御笑覧いただければ幸甚に存じます。

（東洋大学教授・松岡八郎）

●「ある大学教師の物語」（464枚）を丸3年かけてやっと書き上げ、肩の荷をおろしましたところです。これにより39年間の自分の教師生活を総括し、これからの自分の在り方の方向性をはっきりさせることができました。

（田村皖司）

●9月初旬、学術会合のためロシアのカザンを訪れ、ボルガにも遊びました。ある意味で隔離された文化の懐しさ、新鮮さを覚えました。

（元横浜国立大学学長・太田時男）

●8月に久方ぶりに卒業論文指導のゼミでお世話になりましたが、建物がふえているのに驚きました。

（法政大学教授・伊藤玄三）

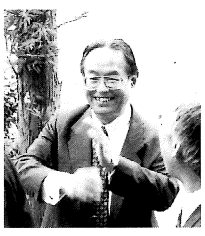
●日頃お送りいただくセミナー・ハウス・ニュースではいろいろな角度から世の中を学ばせていただいております。

（（財）進化生物学研究所・戸張よし子）

●毎年先生のカードで自分の誕生日と年齢を思い出します。51歳で就任し、今や73歳、この頃は残されたわずかな日々を思いつつ過ごすのみです。

（国際司法裁判所・小田滋）

ハウス関係者の消息から①



中嶋嶺雄氏
（東京外国語大学学長）

10月9・10日（木・祝）の両日、東京外国語大学をホスト役に、全国の国・公・私立の外国語大学が「外大」共通の課題について話し合おうという初の「全国外大学長会議」が開催された。ところで、9日午後の東京外大での会議を終えた学長・事務局長・学生部長ら15名が、夕方からは会場を当セミナー・ハウスに移し、一泊して夕食会、懇談会等を行ない、相互の交流を一層深められた。ここでの「合宿」を実現して下さったのは当ハウスの常務理事でもある中嶋嶺雄学長で、「都心のホテルで」の声が多いなか「ぜひセミナー・ハウスの良さを知ってもらう機会に」と熱心に誘致されたのである。そして当日も、夕食会後のひとときに組まれたラウンジでの室内楽コンサートで〝鈴木メソッド〟第一期生のお仲間らと共に特技のバイオリンを演奏され、また翌朝には遠来荘での茶会の前に、ご一行に当施設を自ら案内されるなど、終始「ハウスのホスピタリティ」演出に心を配られた。短い滞在ではあったが、参加者からも「ホテルよりずっとよかった」（高木久雄・京都外国語大学学長）といった感想が寄せられた（**表紙にも関係写真**）

寄贈図書・寄付

●今年も元気で千人会の会費が払えてうれしいです。多摩は区部より寒いです。職員の皆さん風邪など引かずがんばってください。（森玲子）

●私の勤務する国立歴史民俗博物館も数年後に博士課程の大学院が設立される予定です。歴史資料学のような分野での大学院ですが、セミナー・ハウスを使う機会がでてくるのではないかと思っています。（新井勝紘）

●大塚先生も丸山先生も秀村先生も召され淋しくなりましたが、いっそうしっかりしなくてはといいきかせているこの頃です。（明治大学教授・田村光三）

●千人会の誕生日カードありがとうございました。一時帰国で帰って来て留守宅に届いていたのを発見しました。遅れて申しわけありません。お忙しい中、一筆書いて下さっていることに感心しております。（国際連合日本政府代表部・小和田恒）

●おかげさまで11月20日に77歳を迎え、思いもかけず、著作集（12巻）を刊行し始めることになりました。ハウスの益々の充実とご発展をお祈り申しあげます。（日本女子大学名誉教授・青木生子）

●昨年11月末日で早稲田大学を定年退職し、本年6月より日中人文社会科学交流会でお手伝いをしています。（山代昌希）

寄贈図書

'97年9月～11月

日本国際ギデオン教会殿
『新約聖書』

山梨学院大学殿
『行政の透明性』

寄付

'97年9月～11月

三、〇〇〇円＝ホワイト　ホース　シアター
河田芳子殿

二〇、〇〇〇円＝キリストの教会伝道学院長
寺門松雄殿

一〇、〇〇〇円＝打越歴史研究会代表
下島彬殿

九〇、〇〇〇円＝工学院大学教授
須田精二郎殿

業／務／通／信

9月、10月、11月の3ヶ月間の利用状況は、昨年同期間と比較して、36％の減少となった。団体別で見ると、会員校、学術・教育団体、企業社会人団体がそれぞれ15％、23％、94％の減少となったが、非会員校は11％の増加であった。▼月別でみると、昨年と比較して9月は45％、10月は41％、11月は11％の減少。とりわけ企業社会人団体の利用が93％と大幅な減少であった。11月までの8ヶ月間の宿泊延人数の実績は、三〇、〇三二（昨年三四、六二五）人で昨年と比較して13％減少している。▼9月16日は中秋の名月。例年この日にちなんで宿泊者全員にハウスからお団子が振る舞われる。天文学がご専門の一橋大学・中嶋浩一先生から「中秋の名月が、皆既月食になるのはかなりめずらしい。次に起きるのは百三十年後になる。あいにくの天候で雨月になってしまったが」とのテーブルスピーチをいただいた。▼この期間に利用されたグループから「わたしたちの合宿」について語ってもらった。これぞ大学のゼミナールの醍醐味といえるようなゼミ活動を指導されている中央大学・田中拓男先生には、ゼミ活動と当ハウスでの合宿にたいする想いを書いていただいた。▼直ぐ近くにお住まいにもかかわらず、これまで一度も利用したことがないという中嶋先生からは、初めて利用されたご感想をお寄せいただいた。▼当ハウス主催プログラムの大学共同セミナーを契機に発足し、学会といっても過言ではない活動を展開している「現象学・解釈学研究会」が今年で20回を迎えた。この研究会の中心である東洋大学の新田義弘教授は渡航中のために来館されなかったが、この間の事情に詳しい岸恭博氏にハウスとの関わりなど20年を振り返ってもらった。

わたしたちの合宿①

人生設計をえがく場としてのゼミナール

――ゼミ活動の出発点としての合宿――

中央大学経済学部教授　田中拓男

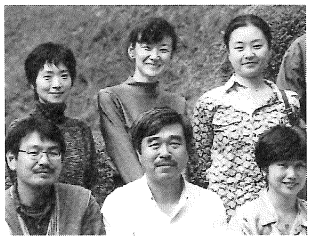
田中ゼミは、国際経済や国際経営の今日的な課題を取り上げ、アジアや欧米に出かけて企業インタビューなどの実証的な調査研究を行なっています。現在二四期の長い活動歴を誇っていますが、中央大学が多摩地域に移転して以来、近くのセミナー・ハウスは、ゼミ員すべてにとっていつまでも忘れられない懐かしい心の故郷になっています。

出会いの瞬間

二年の新人が入ってくると、直後にセミナー・ハウスで田中ゼミ独特の基本理念や活動方針を徹

親身の指導をされる田中拓男先生と和気合い合いのゼミ生たち―本館前広場にて

ハウス関係者の消息から②



篠田節子氏（後列左から2人目）（作家）

97年7月『女たちのジハード』で第117回直木賞を受賞した篠田節子さんは、東京学芸大学在学中、共同セミナーなど当ハウス主催のプログラムに参加すること10数回という、文字通りセミナー・ハウスの"卒業生"である。

昨秋、ブータンへの取材旅行を前に、久々こんどは社会人として共同セミナー「地球市民になろう」に参加し、早速その体験記「地球レベルで二泊三日」を日本経済新聞（11月4日夕刊）に寄稿され、また、日本エアシステムの機内誌『アルカス』（11月号）所載のエッセー「八王子シルクロードあたり」でも学生時代の当ハウスでの体験を紹介された。

来たる2月14日（土）午後8時からのNHK教育テレビ番組「未来潮流」で、篠田さんは少子・高齢化社会の問題をめぐってさまざまな分野の方々と対談される。そして、このほどその録画撮り（一部）で、またセミナーの丘に戻って来られた。「二十年前ここでの共同セミナーでテーマとなった資源・環境・人口・婦人（現在では女性）といった問題が、今なお未解決のまま形を変えて存在していることに気づき、原点に戻ってみようかと考えたことが、再びここを訪ねた理由です」と。

底させるために長時間の話し合いを行ないます。学生諸君との本格的な出会いの瞬間であり、三年間のゼミ活動の出発点になります。ゼミでは、学生の主体的な関心や興味を尊重して五人前後の五班にグルーピングしますが、未熟な学生たちにとってこれはやはり大変な作業になります。しばしば私も入ってセミナー・ハウスで深夜まで話し合い、全員のやりたいことをなんとか調整して五班を形成します。

海外における実地調査旅行

各グループの活動が始まると、学生諸君はいろいろな文献を参考にして、班の調査テーマとこれからの調査方法を絞り込んでいきますが、高度に専門的な問題についてどのように調査活動を展開すれば良いのか、学生はしばしば前進できず迷っています。そこでまたこのセミナー・ハウスでの話し合い、ゼミ先輩の調査活動のノウハウ、今後相談すべき専門家や研究機関に関する具体的な情報などを私の方から詳しく提供し、最終的に各班のこれからの調査活動計画の詳細がまとめられていきます。そのハイライトは、アジア、アメリカ、EUなどの海外における実地調査旅行です。

各班独自に海外の訪問企業や訪問機関を決定します。ゼミナール室では、訪問アポイントメント取りや旅行の日程調整、準備などで全員が連日楽しく忙しそうですが、もっとも重要な仕事は、質問事項を設定して事前に質問表を海外の訪問先に送ることです。論文執筆の準備作業の一環として海外の新しい実地情報を収集していますので、執筆予定の論文について十分詳しいシナリオ（章構成）を構想したうえで、この質問表を作成します。

調査報告論文の作成

セミナー・ハウスの勉強の中でもっとも深い思い出は、三年夏休みの終わりの合宿です。各班は、多くの方々のご協力によって海外現地調査を成功させ、ゼミナール大会に提出する論文の執筆作業に取り掛かります。五人でそれぞれ分担して下書きしてきた論文は、ほとんどの場合大幅な修正が必要になります。専門論文には、問題意識、論旨展開のシナリオ、主張や提言など、明確のメリハリを付けねばなりませんが、二泊三日ほぼ私の体力の限界まで書き直し作業を繰り返させます。この難行苦行を学生に強制するのも、実践的学習の貴重な経験と創造的な活動能力が、就職活動で企業から非常に高く評価されており、学生が自分の希望の人生設計をえがくきっかけになっているからです。ハウスを舞台にした学生たちの素晴らしい活動を『若者たちのキャンパス革命』（文眞堂）にまとめ出版します。

わたしたちの合宿②

参加者が増えた近場でのゼミ合宿

一橋大学社会学部教授　中嶋浩一

当ゼミナールの主テーマは「情報技術の進歩と社会の変化」です。社会学部という文科系学部にあっても、理科系工学部的な知識や技術をある程度極めることが急務です。情報技術と社会の問題について、次々と出版されるその関連図書に、すばやく目を通すということも必要です。このような図書は、年間に20～30冊くらいは出版されていると思われます。

そこで当ゼミでは、これらをゼミ員で手分けして読んで報告し合い、また議論をする、という作業を行なっています。この夏休みの間に、各自の調べた図書について、それぞれ報告し議論しようというのが、今回の合宿だったというわけです。

大学から近いセミナー・ハウス

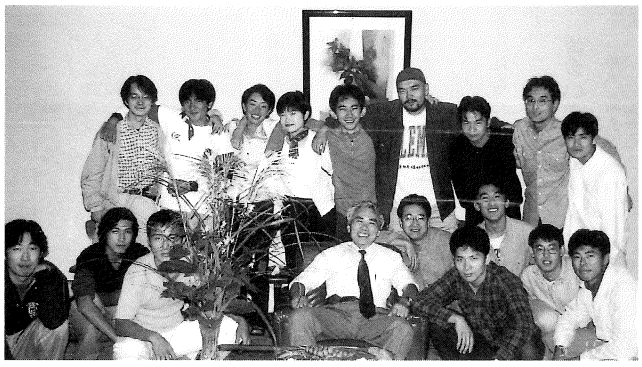
当ゼミは、もう9年近く続いていますが、ゼミ合宿でここを利用するのは今回が初めてです。普段のゼミ合宿では、大学の保有する合宿所や国立大学共同利用の合宿所などが主に利用されます。これらは、宿泊費が大変経済的であり、また比較的自由にできる（！）、というメリットがあります。

しかし、経済的だから、またせっかく都会を離れてはるばる来たから、ということで2泊、3泊という合宿を計画すると、かえって皆のスケジュールの調整が難しいということになってきます。この時期は、4年生の就職関連のスケジュールなどがあって、全員参加ゼミは困難というのが実情です。

そこで今回は、われわれの大学からは近くて便利な大学セミナー・ハウスで、1泊ではあるが2日間を午前から午後までフルに使える、という合宿をやってみようということになりました。

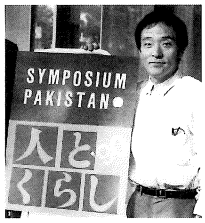
夜遅くまで利用できる

結果から見て、この選択は大成功だったと思います。



初めてハウスを利用された中嶋浩一先生と十五夜の月見団子を前に打ち解ける学生たち―本館ラウンジにて

ハウス関係者の消息から③



広島三朗氏
（相模台工高社会科教諭）

97年8月神奈川県内の高校教師らの「神奈川ヒマラヤ登山隊1997」が、中国・パキスタン国境のカラコルム山脈・スキルブルム峰（七、三六〇メートル）付近で氷塊雪崩に巻き込まれ、隊員六人が遭難死された悲報は、いまだに記憶に新しい。そのお一人で隊長だった広島三朗さんはセミナー・ハウスが大好きという山男先生で、いずれも常連グループの①日本パキスタン協会②日本山岳協会③日本ヒンドゥークシュ・カラコルム研究会などの合宿で度々来泊され、いつもいそいそとお世話役をつとめておられた。パキスタンを心底から愛された広島さんは71年以来26年間に計57回同地を訪れた。88年には若者向け旅行ガイドブック『地球の歩き方・パキスタン編』を全編お一人で書かれた。90年の当紙No121でもコラム「私の国際交流」でパキスタン人の生活を紹介された。「パキスタンにとって最高の日本の友人を失った」と、現地の新聞は同氏の遭難を大きく報道したという。セミナー・ハウスに来られる度に元気なお声であいさつをされた。そのお声ももう聞くことができないが、広島さんはこのセミナーの丘を、きっとあのカラコルムの高峰から見守っていて下さることであろう。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

ます。都合により宿泊できずにゼミのみ参加という人を含めると、今までにない参加率を達成することができました。

もう一つ、このようによく整備された快適な施設では、ともすると、こわい管理人がいて規律の遵守に目を光らせているというのが普通であり、われわれもそれを覚悟でやって来たものでした。すでに利用されている方々には自明のことでしょうが、いうまでもなくこれは全くの誤解であり、さらに今回はなんと、当日がちょうど今年の十五夜だったということで「月見の団子」のサービスまでしていただき、このゼミ写真のような楽しい一時を過ごすことができました。

今年の十五夜の月は、大変珍しいことに皆既月食と重なるということだったのですが、残念ながら天候に恵まれず月は見られませんでした。来年の十五夜の時もまたここでゼミ合宿を、などと皆で話し合ったものでした。ご担当の皆さまに、この紙面をお借りしてお礼を申し上げたいと思います。

わたしたちの合宿③

現象学解釈学研究会の二十年

――形式化しない、〝現在〟であり続ける集まり――

現象学解釈学研究会　岸　恭博

私たちが通称「八王子」と呼んでいるこの研究会も今年で二十回目を迎え、十一月下旬例年のように充実した三日間を終えた。毎回、毎回の積み重ねが二十年という節目になったわけだが、振り返れば短いものである。

きっかけはハウス主催のセミナー

そもそもこの研究会発足のきっかけとなったのは、昭和五十二年十二月、「理性と想像力――現代哲学の課題――」というテーマの第95回大学共同セミナーであった。「セクション演習」のひとつが新田義弘教授（東洋大学）の指導で行なわれたが、この時の参加者たちに妙な連帯感のようなものが生まれていた。現象学への共通の関心がそうさせていたのであろう。

翌年、ふたたび「八王子」で合宿をという声があがり、大学共同セミナー参加者を中心に声をかけて第一回目の研究会を開いたのが「八王子」の始まりだった。卒論＋修論の内容を持ち寄って発表し、討論した。そして来年も「八王子」に集まろうということになったのである。

学際的・国際的な拡がり

三回目あたりから若手研究者も参加してくれるようになり、より一層の刺激となった。もともとこの研究会は哲学ばかりでなく、美学、社会科学、医学、体育学等を専攻している人達によっても成り立っているので、思わぬ視点からの発言は議論を活発にしてくれる。専門分野にとらわれることのない思考は、現代哲学にとってぜひとも必要である。

あるとき、来日中であったドイツの現象学者ホーレンシュタイン教授は、このような研究会の姿を見て、ドイツでは見たことがないと述べておられた。この後もたまたま来日中の研究者が立ち寄って、私たちの質問にも心安く答えてくれるということもある。ケンタッキー大学のブルジナ教授は講演までしてくれたのであった。

「現在」であり続ける

こうして十年が過ぎ、そして二十年となった。当時の若手研究者は、今では日本を代表する研究者となっているし、多くの人が学生達を指導している。そして毎年大学院生を中心に新たに参加してくれる。

この研究会からはいくつかの成果がすでに出版されている。大学の枠を超え、学問分野の枠も超え、そして今や国籍まで超えんばかりの「八王子」を、当初誰が予期できただろうか。しかし研究会としてはあまりに巨大化したのかもしれない。それだけ運営委員の人達は大変なことになったと思う。

それでも学会のように形式化して来なかったのである。このことは、参加者達の関心がつねに生き生きとしていること、つねに「現在」でありつづけていることが、充実した研究会を成立させている表われだと思う。

哲学への関心が深まりつつある現在、参加者一人ひとりが、時代の要求にどのように対応することができるのか。それが出版物とともに問われる「八王子」の成果なのかもしれない。

ハウス主催による大学共同セミナーの指導教授と参加学生から生まれ、20年を迎えた異色の研究会に参加された会員たち―大学院セミナー館ポーチにて

利用状況

'97年9～11月
＊＝同月2回利用
＊＊＝同月3回利用
日帰りを除く

■9月（103グループ、延三、三六三人）

千葉大学人間関係ワークショップ　大塚　和夫
早稲田大学絵画会　篠崎　信雄
東京都立大学助教授　佐藤　誠
慶應義塾大学教授　浅輪　幸夫
日本大学教授　山口　和孝
学習院大学教授
埼玉大学教授
東洋英和女学院大学逸見・東京大学藤田合同ゼミ　寺中　良一
高千穂商科大学ゼミナール連合本部　太田　幸男
駒澤大学教授　田中　拓男
東海大学演劇集団ざざ　内宮　博文
東京学芸大学教授　片桐　正俊
中央大学教授
東京大学教授　佐々木　寛
中央大学教授
明治大学朝鮮文化研究会
中央大学講師
中央大学勝村ゼミ　西澤　宗英
慶應義塾大学講師　新川　哲雄
学習院大学教授　佐藤　憲正
桜美林大学教授
法政大学多摩ＣＳＳ看中会　洞口　治夫
筑波大学準硬式野球部
法政大学助教授
アイセック立教大学委員会　西　源二郎
中央大学道路研究室　大山　恭弘
東海大学助教授
東京工科大学助教授
立教大学文学部集中合同講義2　明石　博行
駒澤大学教授
芝浦工業大学建築学科八王子ゼミ　大野　清志
大妻女子大学教授　嶋津　格
千葉大学教授　鈴木　了二
早稲田大学教授　渋谷　研
武蔵大学講師
東京理科大学物理研究部　西澤　實
日本大学講師　西阪　仰
明治学院大学助教授　吉村　壽
日本大学教授　中嶋　浩一
一橋大学教授　田中麻紗巳
日本大学教授　新保　幸男
明治学院大学講師

明治大学教授　松崎つね子
東洋英和女学院大学教授　池田　裕恵
芝浦工業大学教授　石黒　哲郎
立教大学文学部集中合同講義1　投野由紀夫
東京学芸大学講師　谷　寿美
慶應義塾大学助教授　飯田　和人
明治大学教授　鈴木恵美子
お茶の水女子大学助教授
千葉大学薬学部茶道部　山本　恒
明治大学教授　中澤　進一
青山学院大学教授
千葉商科大学体育会本部フレッシュマンキャンプ　千葉　浩彦
淑徳大学助教授　石田　淳
東京都立大学助教授　井出　祥子
日本女子大学教授　石田　勇治
東京大学助教授　鬼頭　宏
上智大学教授
上智大学キリスト者学生会　黒田　淑子
お茶の水女子大学教授　神保　信一
明治学院大学教授
アイセック上智大学委員会　土肥　恒之
一橋大学教授　水野　朝夫
中央大学教授　北野　弘久
早稲田大学講師　奥平　康弘
国際基督教大学教授　林　正樹
中央大学教授　志水　英樹
東京理科大学教授　湊　博昭
一橋大学助教授　小林　和生
帝京科学大学助教授　平山　満紀
江戸川大学講師
大阪府立大学水泳部　三本松政之
文教大学助教授　酒井由紀代
東洋学園大学教授　田淵　俊人
玉川大学講師
目黒星美学園小学校職員研修　山口　桂子
八千代国際大学助教授　小山田英一
東京商科学院専門学校情報システム学科　有元　典文
文教大学教授
川村学園女子大学講師

恵泉女学園大学講師　川島　堅二
共栄学園短期大学秘書専攻　今井　けい
大東文化大学教授　松井　淳
前橋工科大学助教授
第14回大学教員研修プログラム
日本ホーリネス教団全国教区長会議
情報科学若手の会
キリストの教会伝道学院
人間関係ワークショップ・リユニオン
土曜会
高橋聖書集会
多摩ニュータウンキリスト教会
ユナイテッド・ペンテコステ教会
ホワイトホースシアター
ワゴンウィールス
松本ディベート学会
富士電機／ドラコン／環境プロデュース
〈個人利用〉
クイーンズランド大学講師　スコット・マクリーン
山梨学院大学職員　雨宮　敏弘
■10月（39グループ、延一、四三四人）
電気通信大学教授　渡辺　俊典
東京外国語大学教授　中野　敏男
東京大学助教授　寺田　実
明治学院大学助教授　松本　曜
学習院大学フランス会部
一橋大学助教授　安川　一
アイセック慶應義塾大学委員会
順天堂大学第32回病院業務改善セミナー
中央大学学生相談室
早稲田大学教授　渡辺　仁史
学習院大学教授　江波戸　昭
東京大学教授　内田　慎一
中央大学教授　林田　博光
帝京大学明田・中央大学川原合同ゼミ
立教大学松田・佐々木基礎文献講読
明治学院大学講師　茨木　尚子

大月短期大学教授　村越　洋子
山梨学院大学教授＊　上野　敦男
墨田川高等学校
第回34大学教員懇談会
全国外大学長会議
第175回大学共同セミナー
ホワイトホースシアター＊＊
縄文中期集落研究グループ
くにたち市民オーケストラ
ロイヤルスコティッシュカントリーダンス協会ブルーベルソサエティ
ゼロ会
キリストの教会伝道学院
からだとこころの出会いの会
相模原マンドリン倶楽部
安川電機／環境管理センター／ジェック／相模原ソーシャルハウス
〈個人利用〉
コネクションズ　ベス・シェパード
CTC資料室　古林三樹也
■11月（57グループ、延二、二七五人）
早稲田大学教授　那須　壽
早稲田大学コンツェルト
中央大学経済学会
青山学院大学教授　長谷川浩一
東京都立大学教授　梅垣　高士
法政大学教授　松尾　章一
千葉大学教授　藤井　良治
東京電機大学教授　八木澤壮一
東京都立大学助教授　村上　直樹
慶應義塾大学フランス語研究室
立教大学栗原・佐々木基礎文献講読
桜美林大学教授　永瀬　順弘
早稲田大学助教授　後藤　春彦
中央大学教授　野澤　紀雅
桜美林大学教授　岩城　淳子
東京都立大学教授　鳴澤　實
一橋大学教授　石　弘光
アイセック早稲田大学委員会
日本女子大学助教授　住澤　博紀

日本女子大学講師　坂田　仰
日本大学教授　中西　裕一
早稲田大学教授　佐藤　滋
法政大学教授　福井　秀夫
東京理科大学教授　狩野　紀昭
法政大学助教授　菅沢　龍文
学習院大学教授　坂本孝治郎
早稲田大学助教授　松本　芳之
日本女子大学助教授　小塩　和人
日本女子大学附属高等学校
山梨学院大学教授　上野　敦男
東京神学大学全学修養会
帝京平成大学教授　黒崎　征佑
墨田川高等学校
首都圏ファンタジーグループ研究会
バイオマテリアル若手会
現代思想研究会
第24回国際学生セミナー
現象学解釈学研究会
第18回社会学合同セミナー
PBEM会
日本ルイス・キャロル協会
日本建築家協会
東京UBF
私立中学高等学校スクールカウンセリング研究会
日本精神科看護技術協会
無名の会
ルソール合奏団
日本作業療法士協会
メタコミュニケーションズ
国際教育交流協会
日本グループワークトレーニング協会
日本レクリエーション協会
日本オオタカネットワーク
日本勤労者山岳連盟
日本ピー・オー・ビー広告協会
〈個人利用〉
外務省　吉原　健吾
V研究会　吉本　昌司

館長室から

「暖冬よ」と油断していたところ、ドサリと大雪。暖冬のほうが降雪を誘うの説明に何となく納得はしたものの、ともあれ、多摩の丘は白一色。職員は雪かきに大童の日々です。

表紙は、東京外語大学長中嶋嶺雄氏の一方ならぬお肝入りで、日本ではじめての国公私立合同の外語大学長会議の一部をセミナー・ハウスにお持ち下さった時の一コマです。食堂での正式のフランス料理の晩餐会のあと、三階のラウンジは貴族の居間に変身。中嶋先生自ら第一ヴァイオリンのパートを持たれての室内楽の夕は素晴らしいものでした。ご列席のある外語大の学長は、「来年は私のところの当番だけど、困ったな。こんな雰囲気の会合が持てる場所がないよ」との御感想をのべられ、改めて中嶋先生の御好意を身に沁みて感じ入ると共に、セミナー・ハウスの活かし方、その活動の仕方についても大きな御示唆を頂きました。

ところで、セミナー・ハウスの活動を長い間支えて下さっている千人会の先生方、「生きている証に」とまで仰せ下さって御定年後も浄財をお贈り下さる方々に、いつも心からの合掌を捧げつつ、せめてものお礼心の表現にとカードに一こと添えさせて頂いておりましたが、昨秋より体調ままならず中断しております。「このままならあと三ヶ月位の命」といわれて、十一月初旬より年の暮押しつまるまで、入院の上での加療生活を味わいました。

幸いなことに治療が一応効を奏し、まだ生きています。次の方にお渡しするまでに、何をどのように……と心を配っているところ、どうぞ御支援下さいませ。（岡）

表紙の写真＝10月9日夕、全国外大学長会議の晩餐会のあと、本館のラウンジで開かれた室内楽コンサート風景（12頁「ハウス関係者の消息から①」参照）。

セミナー・ハウス
1997年9・10・11月分（年4回）
第149号
発行=財団法人　大学セミナー・ハウス
〒192-0372　東京都八王子市柚木1987
TEL0426-76-8511　FAX0426-76-1220
振替口座　00150-1-74590
発行人=岡　宏子
編集=大学セミナー・ハウス企画室
制作=中山企画
SEMINAR HOUSE
The Quarterly Journal of Inter-University Seminar House
No.149 (September ~ November, 1997)